

俳句

田川惠良

欠遠寺の鐘撞く朝の露明り  
白露や古き由緒の夜泣石  
山門をくゞれば池のとんぼかな  
延山の静けさに飛ぶ蜻蛉哉  
睡蓮や昔ながらの大伽藍  
睡蓮や水の都に色添えて  
蛸や叱られてかへる寺の門  
秀才の窓の落日や蛸す

日蓮主義俳壇壹萬題出句

春

春寒や拾つて戻る炭の屑

てゐる。空気はいやにつめたく肌をさす。僕は急いで引返して床にもぐり込んだ。代敷の解けた喜びを抱きながら静かに眼をつむつた。(中略)

山路

釋海潤

山また山だ。草鞋の跡を慕ひながら、すた／＼と歩を進める。追分で三人連の人を追越してから又誰とも會はない。日ぐらしの聲のみ高く谿間に響いてゐる、道は左に折れる、そこからは遙か下の川の邊に村の白壁が見える。家を見ただけでも何となく氣強く思はれる、こゝは七面山の嶺続きである。今朝本院を出てから約三時間半になるが、もう四五時間もたつたやうな氣がする、道は杉林にはいつたが少しも人の氣配はない、一人道は全く淋しさがひしと身にせまつて来る。思はず大聲で題目を唱へた、信心より發した題目でなく實際は淋しき紛らはす爲の題目を唱へたに過ぎなかつた。

夏

白刻む片眼の爺や初夏の家

秋

秋風や身に慾もなし金もなし

冬

澄み切つた空に一つの冬の月

◇…………◇

銃後歎吟

維由紀

兵がみなきほひて立てばシグナルの紅き光はこゝろを突くも

堪へ難き罵倒を浴びる心持して入營兵士の傍をよぎれる

膝骨神經痛とふ病を持ってば歡送の旗見送りて思ふかなしさ

銃眼に立ちふさがりて敵陣へ躍り込みたるわれを夢見ぬ

戦の後を統べるてだてとてむづかしき世のおきて定りぬ

林を出ると平坦な山道である、四邊は何處を見てもどんよりとした空に覆はれた山ばかりである。少し上りになつた、上衣を脱いで肩にひつけて急ぐ路は段々下りになつて來た。ふと見ると向ふに何か白いものが落ちて居る。近付いて見るとハンケチだつた、これはきつと前に行つた人が落したのだらうと思つて拾ひ上げて更に急いだ、向ふの角で白い着物らしいのが一寸見えた確かに人だ、小走りに近寄れば案の定三十位の男と學生らしい人と二人連である、たまらなくなつて大聲で呼びかけた「あなたハンケチを落しませんか」といふと向ふの人も振返つた僕と同じやうにしばらく誰とも會はぬからか何となく人懐かしげである「いゝえ落しません」「さうですか」暫く無言。「七面山へ御參詣ですか」「はあ」「あなたも」「え、一寸した會話により數年來の知己のやうに親しく語り合ひ五十丁上りの嶮路もお互に勵ましあひ七面山の本殿に着いたのが四時だつた。奇しくも忘れ難いハンケチが結んだ道連である。(中略)